



痛快・小丸川乗切り伝（秋月種信公）

種信公は文武両道に勝れられ大変賢い方でしたが、思い切ったことをよくなさることで有名でした。家臣の中に権力を振り回す者でもいると、きつく戒められると共に広く人材を求められて召し抱えられました。下の者に対しては愛憐（情け・慈しみ）の心をもって治められました。したがって権臣（権力のある家来）の頭が低くなり、勝れた家来が沢山出るようになりました。ところが、甚だ”かんしゃく”の強い方で、一度思い立ったことはどうしてもやりつけねば気が済まぬ、というところもあったのです。ある時のことです。都農・美々津の方面まで遠乗りに出掛けられました。ところがお着きになる頃、たまたま大雨が降り出し仕方なく滞在されることになりましたが、一夜明けて夜が白みかけた頃美々津を出られ、都農・川南を過ぎ小丸川までおいでになりますと、昨日からの大雨で小丸川は水かさが増し濁流が渦巻いて流れているのです。この様子ではとても渡れそうにありません。一同ははたと困り川辺に立ちすくみました。お供の者は口を揃えて、「殿様、水が減るまでお待ちになって下さい」「しきりに勧めましたが、殿様は

「いや、渡るぞ」

と、今にも馬に鞭を当てようとなさるのです。お供の者はこれは一大事とばかり

「いや、いや、いけませんぞ。もしものことがあつては大変です」と、止めますが、殿様は

「いやかまわぬ、そこを放せ」

と大声で怒鳴りつけながら、馬に一鞭あてて濁流渦巻く川へザンブとばかり乗入れなさいました。これを見た仲間（ちゅうげん）河野某（石原）は種信公に続いて濁流めがけてザンブと飛び込み、馬の”尻がい”（馬の鞍がずらない様に尾に掛けるもの）に取り付きながらお供しました。

入っ



